ブダペスト◉盛田常夫

秋の夜長の徒然考

10月も終わりになると、朝晩の冷え込みが日増しに厳しくなります。鬱陶(うっとう)しいことに、この時期になると、長雨が続き、野外でのテニスシーズンも終わります。

最近ではプライベートのテニスコートも多くなり、大きな天幕を張ったテニスコートがあちこちに見られ、冬の到来を告げるシグナルにもなります。冬のコートは1時間1面1000円というのが相場で、ハンガリー人にとってけっして安くない料金ですが、スポットだと夜10時以降でないと、コートは確保できません。年間契約だと、1面1時間5万円程度ですが、まず夕方5時以後のゴールデンタイムを押さえるのは至難の技で、どうしてこれほどの需要があるのか疑います。他に娯楽がないといえばそうなのですが、これだけの料金を払える層が増えている証拠でしょうか。

ハンガリー人は中・東欧のなかでも実利に聡く、非常にプラグマティックですから、まず自分のポケットマネーで楽しんでいるとは思えません。

多くは有限会社、合資会社などの経費で日常生活のコストを落としているのでしょう。テニスコート、ホテルの温泉・プールの会員権などはその格好の対象になっていますし、ハンガリーの高級レストランは外国人ビジネスマンだけでなく、多くのハンガリー人客で連日、大繁盛です。

●ブダペストも音楽シーズン

やはり秋から冬は、夜の音楽会のシーズンです。小林研一郎さんも11月から国立交響楽団に戻り、春のシーズンに引き続き、ベートーベンの交響曲シリーズを精力的にこなされています。小林さんは来年春、ハンガリーデビュー20周年を迎え、3月6日にリスト音楽院で記念コンサートが企画され、早稲田大学グリークラブとピアニストの加藤洋之君（リスト音楽院、安宅賞受賞、90年ジュネーブ国際コンクール3位入賞）の共演が予定されています。国立交響楽団の70周年記念コンサートと合わせ、楽しい行事が続きます。

ちょうど11月6日の土曜日、ベートーベンの2番、5番のコンサートへ出かけ、思いがけない朗報を得ました。コンサートの開始に先立ちアナウンスがあり、ウクライナ生まれで、旧ソ連の巨匠リヒテルが突然、ブダペストを来訪することになり、火曜日に特別の演奏会を催すことになったので、休憩時間にチケットを発売するというのです。1枚1500円のチケットをありがたく買い求めたことはいうまでもありません。

リヒテルにとって、ブダペストは特別の感慨がある街だということが、後で分かりました。彼が初めてソ連を出て外国で演奏した都市が、ブダペストだったのです。1954年のことです。新聞報道によると、これには語り継がれた伝説があり、リスト音楽院で開催されたリヒテルのコンサートにはわずかな聴衆しか集まらず、リヒテルをがっかりさせたのですが、休憩時間に聴衆が友人たちに電話を掛けまくり、とんでもない無名のピアニストがいるから駆けつけよと伝え、第2部が始まる頃には満席になったというのです。当時、それほど電話が普及していたとも思われませんから、この話、割り引きして信じるよりほかはないのですが、リヒテルがブダペストの聴衆に満足したことは確からしいのです。

彼はその後、毎年のようにブダペストを訪れていますから、良い印象をもったのでしょう。旧ソ連の学者、芸術家にとって、西側世界への旅行がむずかしい時代に、ブダペストへの旅行は楽しい息抜きの時間だったようです。経済学者でもアギャンベギャンなどは事ある度に、ブダペストを訪れていたことをハンガリーの友人から聞いたことがあります。

同じロシアの俳優で舞台監督のユーリ・リュビモフもブダペストが好きで、夫人はハンガリー人です。最近、フロリダの家を売り払って、わが家の近所に家を買ったという噂が流れてきました。彼の発案による「ドン・ジョバンニィ」の舞台が好きで、1983年以来、繰り返し鑑賞してきました。オーケストラを舞台にあげ、残りのスペースをうまく使い、歌手がパントマイム的に動き歌うの

です。レポレロ役のポルガール・ラースローはリュビモフの舞台に欠くことのできない歌手で、2メートルの体駆から繰り出す声が素晴らしいだけでなく、その声に引けを取らない巧みな演技に彼の評価はこの舞台で一躍高まりました。残念なことに、この舞台装置は昨シーズンで10年の役目を終え、来シーズンからは新たな装置で演じられることになります。ちなみに、チェスの天才3人娘を育てたポルガール氏と同姓同名ですが、別人です。

ロシアあるいはウクライナの人々がブダペストを好きになる理由の一つに、ブダの丘陵地帯の眺望がモスクワやキエフの郊外をほうふつさせるのだと聞いたことがあります。気候も温暖で、生活に不自由せずに過ごせる分だけエンジョイできる親近感のある都市だということです。モスクワは分かりませんが、キエフの街はドニエプル河を挟んで、丘と平地に分かれていて、ブダペストに似ていることは確かです。オデッサのオペラハウスで育ったリヒテルも、ブダペストに古き良き時代のオデッサを見るのでしょう。

●リヒテルの信条：RAM 型の推奨

今年はグリーク生誕150周年にあたり、リヒテルはグリークの小品集を抱えて演奏旅行をしているようです。気むずかしいことで定評のあるリヒテルは、ここでも11月4日の木曜の夜にマネージャーを通じ、ウイーンへの途中にブダペストに逗留したいとの意向をハンガリーのフィルハーモニィ事務局に伝えたようです。演奏まで正味4日、口コミでコンサートの開催が伝わり、当日は1500人以上を収容できるコングレス・ホールは満席でごった返していました。

あまりの混雑にコンサートの始まりが20分も遅れ、リヒテルより厳しいメッセージが伝えられました。「静粛にしないと演奏は始められない、曲の変わり目に拍手をしてはならない、カメラのフラッシュが焚かれた場合には即座に演奏を中止する」との伝言で、聴衆はやや緊張気味に開演を待ちました。

彼の演奏を初めて見て驚いたのは、このような小品の演奏に楽譜を使っていること、それから舞台の照明を消し、楽譜を照らすランプを使って演奏するスタイルです。以前に麻雀仲間で、ひどい近視の友人が、自分の手牌を照らすランプを持ってきたのを思い出しましたが、リヒテルの場合には、彼なりの考えがあってのことと思いきや、プログラムにはその理由が記されていました。

暗譜で演奏を始めるスタイルを確立したのはリストで、リヒテルも最初は暗譜で演奏していたようです。後に、楽譜を携えて演奏するスタイルに変えたのは、レパートリーの拡大にとって、暗譜に労力を使い、かつ演奏時に正確に弾こうと気を使うことが演奏家の自由度、創造力を損なうという考えからのようです。もちろん、楽譜を見ての演奏も、同様の問題をひき起こしますが、こちらの場合は必要な箇所のみを見るわけですから、慣れで問題を解決できるというのが彼の考えです。

この考え方は共鳴できるところがあります。たとえていえば、人の大脳の記憶部分のうち、RAM（random access memory）と ROM（read only memory）の配分に置き換えてみることが可能です。つまり、情報の集積（ROM）に容量を取りすぎると判断に当てられる部分（RAM）の容量が小さくなり、RAM の情報処理能力が落ちます。天才は RAM 部分も ROM 部分もけた外れに大きいと考えられますが、ふつうの人では ROM に多くをとれば、RAM の能力が落ちるというのが私見です。

大方の人は RAM 型か ROM 型の典型に分かれ、バランスの良い人はあまりいません。秀才と呼ばれる人には ROM 型人間が多く、とくに官僚は ROM 型でないと務まりません。私自身、電話番号を覚えるのも、楽譜を覚えるのも苦手です。というより、小さな大脳に無駄な情報を入れたくないという本能が働き、覚えようという気持ちが湧きません。その意味で、RAM型です。

こうして考えると、リヒテルの信条は、「芸術家たるもの RAM 型であれ」と解することができるのではないでしょうか。ROM 部分はできるだけ脳の外の楽譜に収めておき、必要に応じてそこから情報を引き出せば良いのですから、外部記憶装置を使う分だけ脳の自由度が高まるというわけです。

また、舞台照明を消してしまうスタイルは、演奏家の衣装や表情、指の動きは芸術と関係ないという彼の姿勢を表わしているようです。確かに真っ暗な舞台から飛び出してくるものは音だけですから、それ以外のものへの余計な関心を聴衆から奪う効果はあります。ヴィジュアルな時代に育った若者には物足りないかもしれませんが、これも有効なスタイルと考えるべきでしょう。もっとも、副産物として、眠気を誘う効果を否定できませんが。

［1993年11月10日］

（もりた・つねお／野村総合研究所研究顧問・ブダペスト経済大学客員教授）